



「信じる」から広まるいよ

市川市立第八中学校 二年 松本 悠愛

私は、小学四年生の夏休みに、母に誘われ最高裁判所見学に行った。見学に行く前までは、最高裁判所がどんな場所なのか、全く分からなかったし、知らなかった。でも、この見学に行っていないければ、今の私の考え方はなかったのかもしれない。

「すごく大きな建物だな。」

見慣れない光景に、胸が高鳴った。でも、見学していくうちに、その気持ちは一変した。裁判所は、争いを解決したり、犯罪を犯した疑いのある人が来る場所だと知ったからだ。全国に何ヶ所もある裁判所の中でも、最高裁判所は全国に一ヶ所しかないことも知り、自分は今、そんなに重要な場所にいるのだと、心から驚いた。その場の雰囲気緊張したけど実際の体験はとても貴重なもので、経験することができて本当によかったと思う。法廷見学では、実際の裁判官の席に座ったり、本物の法服を着

ることができた。当時の私にとって本物の法服は大きくて、裁判官の方の存在がとても大きいように感じた。また、子ども達だけで模擬裁判を行う裁判体験では、いつもより大人になれた気がして嬉しかった。見学を終えた私の心は弾んでいた。本当に楽しかったし、裁判官の方々はとてもかっこいいと思った。この表現が不適切だと感じる人もいるかもしれない。しかし、見学をする前まで裁判所について何も知らなかった私にとって、この一日は今でも鮮明に覚えているくらい大切な日になった。今、私には疑問に思うことがある。裁判官の方々はどんな気持ちで裁判を行っているのか、ということだ。人それぞれ考え方は違う。でも、どんな状況だとしても、いつだって正しい判決を下さなければならぬ。私はこの疑問に対して、自分の答えを考えてみることにした。私は、裁判官の方々は「信じる」

気持ちを大切に裁判をしているのではないかと考えた。正しい判決を下すためには様々な意見に耳を傾け、信じる必要があると思うからだ。今までの経験をふまえ、私は信じてあげることが罪を犯してしまった人たちが立ち直るきっかけになると思った。犯罪や非行をしてしまった人たちはどんなに自分自身が反省して、普段通りの生活がしたいと思っても、どうしても周りの人の視線が気になってしまつのではないだろうか。たとえ周りの人々が嫌な視線を送っていなくても、罪悪感を感じてしまつと思う。無罪でも、無実でも、事件に関わつただけで軽蔑されてしまつことも、少なくないのではないだろうか。私は差別や軽蔑を受けて立ち直れずにいる人々が増えてほしくないし、立ち直れていない人がいるのに、助けようと思わない人がいる社会にはなつてほしくない。助けてあげたいと思つても、行動に移すことは難しいことだと思つし、勇気のあることだと思つ。でも、誰かが行動すれば立ち直れる人が増えていくかもしれない。はじめは一人が行動しているだけでも、そのうち行動する人が増えて、立ち直れる人も増えていくと思つ。助けようと行動している人は、また新たなことにチャレンジし

てほしい。この人を信じようという思いがあるからこそ、行動を起こしていると思つし「信じる」ということは、立ち直れるか、不安でいっぱいな人々にとつても心強いことだと思つ。立ち直ることができた人が社会で活躍すれば、その姿を見た人々も勇気をもらえると思つ。そしてその姿は、立ち直ろうとする人たちに、大きな希望をあたえるだろう。手を差し伸べてくれたらその手を借りて、また前へ進めばいい。そして、成長した姿を見せて勇気と希望をあたえる。この世界が「give and take」であふれる世界になつてほしいと思つ。勇気や希望をもつた人は、自然と笑顔になつて笑顔もどんどん広まっていくな。このように信じるのが社会を明るくしていくと思つ。みんなで助けあつて、立ち直つて、頑張る人がたくさんいれば、明るい社会が作れると思つし、私はそんな社会で生きていきたい。人を信じれば自分も信じてもらえるようになる。「信じる」ことから、思いやりのある明るい社会ができるように、私も自分から行動して、たくさんの人を笑顔にできるように人になりたい。このことをもっとたくさんの人に広めて、「信じる」ことの偉大さを知ってもらいたい。